

従来エイドとセルフが半々 ホノルル

200㉔ごとに給水地点が 湘南国際

●ホノルルマラソン

以前は日本から2万人近いランナーが参加したこともあるホノルルマラソンですが、コロナ禍で2021年大会は日本人がわずか181人。しかし50回記念の2022年は5,400人まで回復。全体ではフルマラソンと10kmウォークを合わせて28,000人の大会になりました。

アラモアナ公園をスタートしダウタウン、ワイキキを通りダイヤモンドヘッドをかすめてH1フリーウェイのハワイカイで折り返しワイキキに戻る42・195kmのコース上には3kmから4・5kmごと17カ所の給水(エイドステーション)が設けられました。

主にスタートからワイキキを抜けてダイヤモンドヘッドの脇を登るあたりまでの区域は往路、復路とも水やスポーツドリンクがカップに注がれてテーブルに置かれ、それをランナーが取る従来通りの給水ポイントとなっています。

一方、2021年から取り入れられたセルフサービス給水は、H1フリーウェイを折り返す16kmから35kmまでのエイドステーションに多く設置されていました。

セルフエイドの基本はランナーが用意したシリコン製などのカップやウォーターボトルを使い、自ら柵につけられているパイプから流れ出る水を汲み飲む方式で、エイドに備え付けの紙コップはありません。

ただセルフエイドの中にも、ボランティアスタッフが用意した紙コップを渡しているところや、ボランティアスタッフがたくさん配置されている場所では、ボランティアが水を注いだ紙コップをランナーに激励とともに手渡している地点もありました。

スポーツドリンクはセルフのエイドステーションには置かれていません。食べ物もすべてのステーションで用意はなく、2カ所ほどにジェルがありました。コロナ禍前にはセルフエイドステーションはなく、感染対策での接触機会の削減とともに、フルサービスの給水より、確保するボランティアの数が少なくて済む面もありそうです。

サステナビリティ・環境に配慮する取り組みについて、大会の主催者はコロナ禍以前から長く取り組んできたと説明しています。

例えば参加者のマイカー利用不可と大型バスでの必要最小限の輸送でCO₂の排出を抑制。大会Tシャツ、給水スポンジの再利用、スタート地点での衣料預かりサービスの中止(事前預かり)といったリサイクルの推進、エントリーでのオンライン化によるペーパーレス化、フードの提供中止や配布物の個別・過剰包装を避けるなどゴミ削減の取り組みが、1990年代から徐々にスタート。2021年大会からのセルフエイドはゴミ削減とリサイクル推進の一つとして位置づけられています。

●湘南国際マラソン

コロナで3年ぶりの開催になった湘南国際マラソン。特徴は給水ポイントの大胆な発想転換でした。

給水の紙コップやペットボトルはすべて廃止。約200㉔おきに12㉔の蛇口付き水ボトル10個とスポーツドリンクの入った20㉔のステンレスジャグ6個が2本の机の上に置かれます。2019年大会では13カ所の給水ポイントが設けられましたが、今回はコンパクトなエイドが約200カ所。給水の総量は約50トンになります。3200を越す蛇口がコース上に配置されました。



コースの200㉔おきに設置された12㉔水ボトルからマイカップに水を注ぐランナー

ランナーは持参したマイボトル(400㉔以上)を携帯してスタート。必要ときにコースサイドの水やスポーツドリンクを補給。コース上のゴミ箱もすべて撤去したので、持参したジェルなど補助食やサブリの包装などのゴミは、ポケットやポーチなどを用意してフィニッシュまで持ち帰ることが求められます。

一方で大会の性格上、記録を争うエリート選手には必須のスペシャルテーブルは設けられません。また冬期のレースでもあり、頭から水を被る、顔を洗うなどは、水の消費が多くなるので、なるべく控えてと呼びかけました。

「世界で初」という徹底したマイボトルマラソンは、ザ・ノースフェイスの国内商標権を持ち、大会の主要スポンサーとなったゴールドウインの全面的なサポートを行いました。トレイルランニングの大会ではゴミを捨てない、環境に影響を与えないことがごく当たり前に行われているように、ロードの大会でも環境配慮の大会が出来ないかというのが発想の原点。研究を重ねて、今回の実施に結びました。

同社では、コンペティション(競技・競争)優先の大会、マイボトルマラソンのような環境配慮での満足感や社会貢献ができる大会など、参加する目的によってその選択肢が増えれば、としています。

この大会にはフルマラソンのほか10kmや2kmも合わせて16,000人がエントリーしました。大会全体のゴミの排出量は、2019年大会と比べて約70%の削減。コース上のゴミではペットボトルの排出が0となり、約87%のゴミの削減になりました。またこうした取り組みでの大会のCO₂削減効果は約6tと算定されています。

大会後のアンケートでは、参加者のうちの約86%がこの取り組みの継続に賛成。給水はスムーズだったとの答えも76%に上りました。紙コップやペットボトルをテーブルに並べたり、そのゴミの回収の作業がなくなったので、ボランティアは360人と前回の1,270人より大幅減。大会全体でも1,500人と前回の半数でした。